

Peshawar-kai

ペシャワール会報

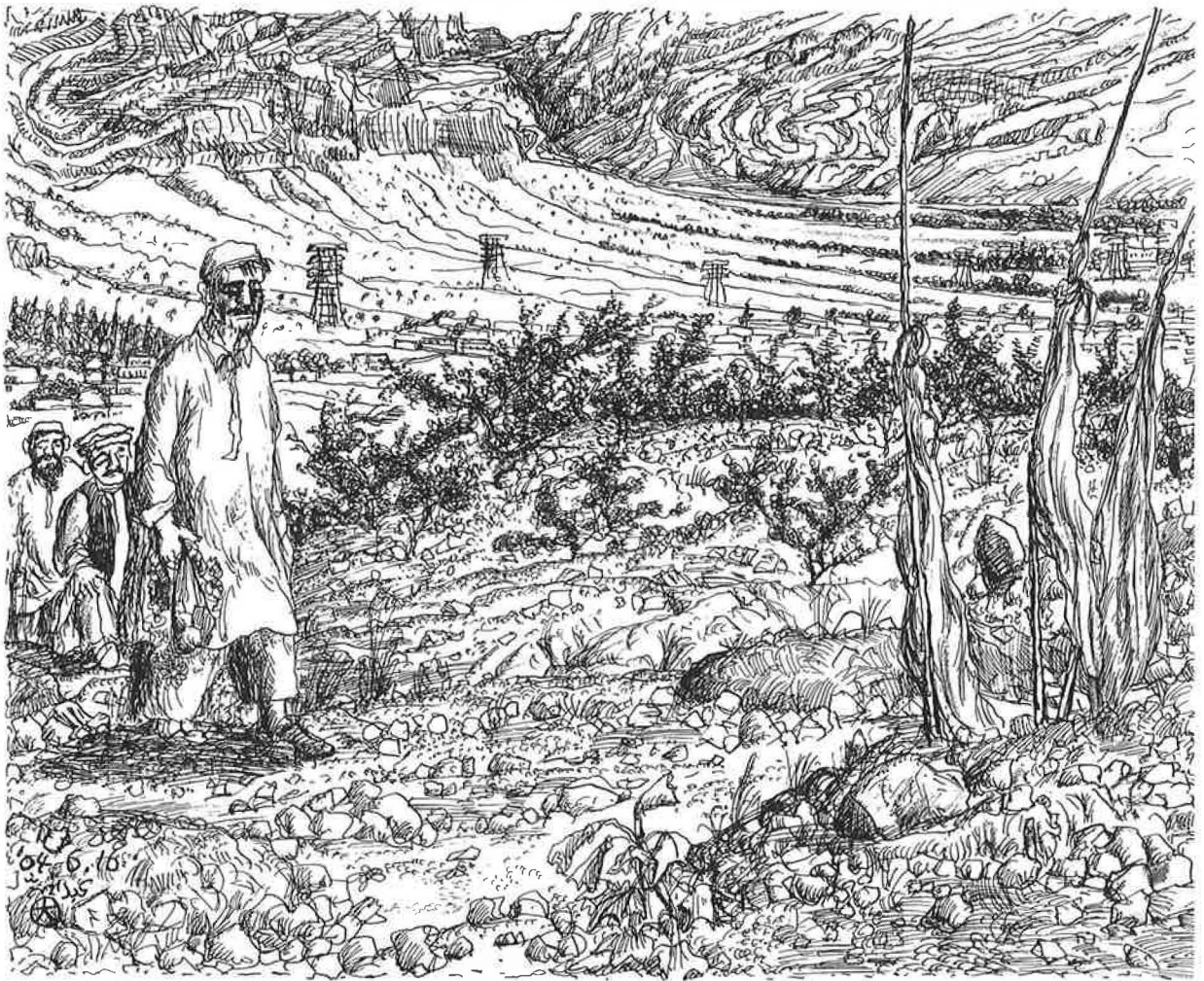
ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル307号室
TEL 092 (731) 2372
FAX 092 (731) 2373

No.80

2004年7月7日

〈URL〉 <http://www1m.mesh.ne.jp/~peshawar/>

〈E-mail〉 peshawar@mx.mesh.ne.jp



表紙絵 泣き蟲アミンの帰郷 甲斐大策

進まぬ復興、遠のくアフガン —2003年度を振り返って—

中村 哲

2003年度会計報告

ペシャワール会事務局

人々のニーズこそ事業の原動力と痛感

村上 優

患者情報の扱いにもお国柄を感じてしまいます

仲地省吾

用水路への期待は想像以上です

伊藤和也

儉約の精神で備品購入に奔走

本田潤一郎

農業計画の歩みを振り返って

高橋 修

PMS病院検査室のある一日

坂尾美知子

水路建設、夏の陣

橋本康範

ペシャワール会の活動は、1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

進まぬ復興、遠のくアフガン

帰還難民増加に備え、用水路は最難関の工事を開始

「9・11以後」という言葉をよく耳にする。確かに表層の現象を追えば、何かが突然変化したように思える。だが現地から見える光景は少し違う。世界と人間は何も変わっていない。…それでも、変わらぬ人の良心に私たちは耳を傾ける。それは「国際〇〇」でくくられる擬似的な普遍性ではない。いつの時代でも、どんな場所でも人を慰め、人を戒める事実である。…我々に欠けているのは「進歩」ではなく、人としての自省である。これがある限り、世界的な破局は恐れるに足りない。敵は我々の中にある。

PMS（ペシャワール会ジャパン・医療サービス）総院長 中村 哲

2003年度を振り返って

ペシャワール会が結成されたのが一九八三年九月、小生がペシャワールに着任したのが八四年五月、ちょうど二十年が過ぎた。しかし、会が事実上ひとり立ちして歩み始めたのは、PMS（ペシャワール会医療サービス）の母体になる団体が八八年に出来てからであるから、満十五歳というのが正しかろう。「思えば遠くへきたもんだ」というのが実感で、思いは語りつくせない。自分が生きて、こうして報告書を書いていることさえ、不思議である。

世の中には分からないことが多い。特に二〇〇〇年からの大旱魃かんぱつに次いで、二〇〇一年の「9・11」とアフガン空爆の大騒ぎから、私たちが何気なく信じている多くのことが、案外錯覚や誤った認識に基づいていて、どうもインチキくさい世界に生きていることが肌身にしみ解ってきた。「9・11以後」という言葉をよく耳にする。確かに表層の現象を追えば、何かが突然変化したように思える。だが現地から見える光景は少し違う。世界と人間は何も変わっていない。人間の分限を超えた思い上がりや欲望とが、亡霊となって膨らみ、私たちにとり憑よっているのだ。恐ろしいのは、「文明の正義」と称し、自省なくそれに踊らされ、簡単に殺し、嫉み、憎み、党派心を起し、傷つけあうことである。私たちの文明は人類の発生から続く野蛮の上に張る薄い氷の膜に過ぎない。ここ数年の凶暴な国際社会の動きは、それを実証した。



灌漑用水路の部分通水直後の様子

今や「民主主義」ですら、戦争の正当化に使われるという、面妖な世の中になってしまった。

それでも、変わらぬ人の良心に私たちは耳を傾ける。それは「国際〇〇」でくくられる擬似的な普遍性ではない。いつの時代でも、どんな場所でも人を慰め、人を戒める事実である。我々は限られた時間で、限られた空間の中で生きてゆかざるを得ない。現地活動もそうで、「国際協力」ではなく「地域協力」である。縁あって長くなり、大きくなつたに過ぎない。時流に乗せられて、何かの享楽の手段や、一見権威ある声に惑わされてはな

らない。脚下照顧という。我々に欠けているのは「進歩」ではなく、人としての自省である。これがある限り、世界的な破局は恐れるに足りない。敵は我々の中にある。これが二十年のささやかな結論である。

2003年度の概況

二〇〇三年度はペシワール会が始まって二十一年目である。二〇〇一年十月の米軍によるアフガン空爆、「対テロ戦争」という名の新たな軍事戦略は、「9・11以後」として世界中を揺さぶった。破壊と復興支援が対となり、その論理は「民主化」、「テロ防止策」として、先進諸国に説得力を持ち、イラク・パレスチナを始め、イスラム世界で猛威を振るった。事情を知る者が強く警告したように、対テロ戦争、武力による「民主化」は、テロリスト予備軍を大量生産した。復興支援で潤う一握りの都市中産階級をのぞけば、少なくとも東部アフガンで米軍と外国勢力の存在を快く思う者はほとんど居ない。

イラク占領の「手本」とされたアフガン問題は世界の関心から遠ざかった。明るい「復興」の報道の後、あたかも民主国家成立が着々と進んでいるかのような印象を残し、アフガニスタンは再び忘れ去られた。しかし、米軍や同盟軍への攻撃は後を絶たず、パキスタン北西辺境州自治区にアルカイダとタリバン勢力が潜伏すると見た米軍は、〇三年秋から大規模な作戦を展開した。だが、自治区住民は頑強に抵抗し、東部アフガン（クナー

ル州、ニングラハル州、ローガル州、カンダハール州）の国境地帯は混乱している。

さらに、イラク侵攻・統治に忙殺される米軍は、功を焦って民政に関わり始め、一方で軍事的関与をNATO諸国に求めつつ、他方国連と協力して八十億ドルの巨費を投じて「〇四年九月の総選挙実施」を演出しようとしている。地元民は「イギリスの悪知恵、アメリカの軍事力、日本のカネの三位一体だ」と陰で揶揄している。対日感情は今後、いっそう悪化するだろう。〇四年五月、現地のニュースで「日本軍（陸上自衛隊）をアフガン派遣」と報ぜられるや、一般民衆の間で不信感が一挙に広がった。PMS（ペシワール会医療サービス）では、自衛のため泣く泣く日章旗を塗りつぶし、緑の旗に変えた。これは日本人として屈辱的であった。〇三年十一月、PMS水路工事現場で米軍ヘリが我々を襲撃したが、これはごく一例に過ぎない。現地では度重なる誤爆の犠牲者に加え、捕虜虐待、枯葉剤の散布などで外国人への敵意が潜行拡大している。

事態は選挙どころでないのが実態で、パキスタンだけで一六〇万人と言われる難民の困窮はほとんど改善されなかった。大半が飢餓に直面し、故郷から避難先へ舞い戻ったのである。世界に散発的に伝えられたのは、首都カーブルを初めとする大都市の現象と政治的動向だけであった。しかも支援の七割以上が国連・外国NGOを通して与えられたので、いくら米軍に擁立された政権とはいえ、アフガン政府は官吏の薄給さえ支払えず、カルザイ政権自ら援助機関を経由しない「直接の援

助」を訴える有様であった。麻薬撲滅も、国軍創設も、武器回収計画も、思うように進んでいないのが現実である。

二〇〇〇年に本格化した大旱魃は四年目を迎えたが、いよいよ深刻化している。〇三年四月、WFP（世界食糧計画）は「三十年ぶりの大豊作」を予告したが、わずかに雨が増えたのみで雨水に頼る小麦作はことごとく壊滅、予言は当たらなかった。逆に〇三年十二月から期待された高山の降雪量は異常に少なく、〇四年度の旱魃と砂漠化はさらに進行するものと思われる。事実、PMSが完成した井戸は次々と涸れ始め、地下水位の異常な低下が至る所で観察されている。国民の八割以上を占める農民たちの実情を考えると、「アフガン国家の破綻」は決して戦争や政治問題でなく、異常気象⇨砂漠化によってもたらされることは確実だと思われる。

しかも、この旱魃が突然現れたのではなく、十年以上をかけて徐々に悪化の一途をたどっていることを考えると、為政者も外国援助団体も、その深刻さに戦慄すべきであろう。国家を底辺から支えてきた農村の分解が促進され、飢えた流民が大都市にあふれる。彼らは決して明るい「アフガン復興」の話題に上らない。そして、アフガン社会のモラルを強固に支えてきた不文律、農村の掙が弛緩し、外国製の「民主化」が強要行される。混乱は必至だと考えざるを得ない。彼らの生活安定以外に、治安の改善も、国家再建の道もないというのが我々の見方である。

PMSの活動概観

以上のような状況下で、PMSとしては医療に加えて二〇〇〇年夏以来、飲料水源の確保に奔走してきたが、二〇〇三年六月までに一千ヶ所の完成を見た。しかし、農業以外に生活手段がない所では、たとえ故郷に居ても生計が成り立たない。そこで、〇三年度は、農業用水の確保を本格化し、「緑の大地計画」の実施段階に入った。

これまでもカレーズの再生、灌漑用井戸の掘削を手がけてきたが、〇三年三月、全長十四キロメートルの用水路建設が着工した。〇四年三月現在、二キロメートルの難所を完成、さらに工事が進められている。

医療関係は、これまで通りの活動が継続されている。パキスタン最北端のラシュト、アフガン東部山岳地帯のガラエ・ヌール、ガラエ・ピーチ、ヌーリスタン（ワマ）の各診療所では十三年を経て、住民たちとの絆は不動のものとなった。現在の水源事業も農業計画も、その基盤の上に成り立っていることを忘れてはならない。ガラエ・ピーチ溪谷の「沖縄（オキナワ）ビス・クリニック」は、〇三年九月に落成、十二月までに移転を完了した。

ガラエ・ヌールの試験農場では、乾燥に強い作物栽培の研究、茶などの換金作物の試みが継続されている。しかし、早魃の悪影響は予想を上回り、思ったほどに事は進んでいない。今後も息の長い活動が必要である。

なお、日本人ワーカーが増員され、二十代の青年層の働きが目立った。

03年度事業報告及び04年度の計画

1. 医療事業

二〇〇三年度は一六〇、三八九名が診療を受けた。ペシャワール基地病院、各診療所の実績は別表2、3（7頁）の通りである。

ガラエ・ピーチ溪谷の「沖縄（オキナワ）ビス・クリニック」は、〇三年九月に落成したが、同時期に米軍の活動が活発となり、建設・移転が難航した。ワマ診療所も改築中、ラシュト診療所は増築中である。

PMS（ペシャワール会医療サービス）基地病院では、高給を求める医師、看護師、検査技師が大挙してカブールに移り、一時診療態勢が危機に陥った。その上、水路建設事業のための重機や資機材調達、急増した日本人ワーカーの世話に忙殺されて過重な負担となったものの、よく持ちこたえて従来規模の診療が継続されている。藤田院長代理の指導下で、中山会計担当、仲地医局長、坂尾検査技師ら、が長期に安定して働き始めたのは大きな成果であった。

二〇〇三年度（〇三年四月から〇四年三月）の診療数は別表1のとおり。

基地病院における検査件数は三四、〇七六件で、内訳は別表4の通り。

2. 飲料水源確保事業

二〇〇〇年七月、早魃被害の著しかったガラエ・ヌール診療所付近に端を発した本事業は、空爆下でも休みなく続けられ、〇三年六月には作業

地一千ヶ所を超え、〇四年六月現在、千二百ヶ所に迫った。ガラエ・ヌール下流域は、最も飲料水源に恵まれた地域となり、同地の腸管感染症は激減、住民のほとんどがパキスタンから戻った。トルハム（カイバル

）は、給水設備をも整備、理想的な形で住民自治会の手で自主管理され、全バザール数百軒への給水が可能となった。三年前の水無し地獄を

表1

診療所	外来数	外傷治療数	入院数	総計
PMS 基地病院（ペシャワール）	50,537	6,162	1,773	58,472
チトラール・ラシュト診療所	4,584	151		4,735
ヌーリスタン・ワマ診療所	14,969	972		15,941
ガラエ・ピーチ診療所	35,750	1,652		367,152
ガラエ・ヌール診療所	42,680	1,409		44,809
計	148,270	10,346	1,773	160,389

思うと今昔の感がある。

しかし、地下水位の低下、帰還難民の増加などで、他地域の水欠乏は至る所で行よいよ深刻である。今後は、最大の人口を抱える早魃地帯、ソルフロッド郡やシェイワ郡北部、ガラエ・ヌール上流域に拡大する。かなりが再掘削をくりかえし、ボーリング掘削も増加している。

二〇〇四年六月現在の状態は以下のとおり。（表5）

今後も活動地は早魃の最も甚だしいニングラハ

ル州に限定、三年以内に総数二千以上の井戸の完成を目指す。しかし、一千本の井戸の全面管理を行えば、新規掘削が不可能に陥る。そこで、〇三年度は完成井戸から次々と住民への受け渡しを始めた。維持は今後、村民の自主管理を進めさせ、PMSによる直接管理から「自主管理支援」の方針を採る。

なお、灌漑用井戸、カレーズは今後、用水路と共に「灌漑計画」の一つとして述べる。

3. 灌漑事業

(1) カレーズ…これまでダラエ・ヌール中下流域で三十八ヶ所の復旧を手がけ、何れも水を得ている。推定灌漑面積は約四〇〇〜五〇〇ヘクタール。しかし、今年は水量の減少が著しく、しばらく観察を続ける。

(2) 灌漑井戸…二〇〇一年六月に試掘した大口径の灌漑井戸は、一本当たり二五ヘクタール前後を灌漑できる。カレーズの恩恵に浴さなかったダラエ・ヌール渓谷下流域、ブディアライ村・ソレジ村では、〇三年度内に十一カ所を手がけ、うち九本が完成。全部で約二〇〇ヘクタール以上を潤した。今のところ著しい水位減少は見られていないが、次第に減少が予想され、かつ「地下水争い」も発生しつつあるので、急増せず、次に述べる大河川からの用水路を引いた後、再考する。

(3) 用水路…詳細はこれまでの会報を参照。アフガン東部で最大の川、クナルル河から水を引き、ニングラハル州北部の早魃地帯（何れもダラエ・ヌールからの水系に頼っていた地域）、クズクナ

ール地域全体、ブディアライ村最下流域、シエイワ郡北部の約二千数百ヘクタールを一挙に灌漑する計画である。全長十四キロメートル、予定流量が毎秒四〜五トン、これによって小麦・トウモロコシの二毛作が可能になった場合養い得る人口は、子供を含めると、十万人を超える。実際の着工は〇三年五月十三日で、紆余曲折の後、〇四年三月までに取水口から二キロメートルを完成した。現在、最大の難所である次の三キロの工事に集中、ペジャワール基地病院の直轄で進められている。今夏中に完成すれば、クズクナール地域の約三分の二、約五〇〇ヘクタールが先に潤せる。

パキスタン北西辺境州に難民として逃れていた農家は、噂を頼って徐々に帰り始めた。現在、荒廃していた家屋が灌漑予定地に続々と復活している。この水利事業に携わる作業員は、〇三年度だけで延べ約十四万人。大半が水の到来を待つ農民である。第一期工事十四キロメートルは〇四年度内に完成予定。その後は改修を重ねて、三年以内にアフガン政府と地域住民自治会に譲渡する。

4. 農業計画

ダラエ・ヌールの試験農場では、様々な試みがなされている。小麦、トウモロコシの二毛作が基本だが、〇三年度はサツマイモが広がる期待を持たせた。さらに収穫高を上げるために、土壌の改善、品種の選定の研究と実施が地道に行われている。場所によっては、果樹、茶などの換金作物も試みられている。畜産の前段階でソルゴーなどの飼料のサイレージも奨励されようとしている。

しかし、用水路の突貫工事が〇三年十二月に始まると、日本人ワーカーが駆り出されて行き届かず、現在建て直しが図られている。

5. ワーカー派遣事業

事業規模が拡大の一途をたどり、さらに積極的に人材が送られた。しかし、仕事に慣れるまで最低一年以上を要するので、「ボランティア」という名称を廃止、「ワーカー」と称し、任期を二年以上とした。今後は長期派遣者が増えるよう工夫



取水口から二キロメートル地点にある巨大な貯水池。



現地レイバーらとともに

査11名、薬局2名、ワークシヨップ2名。

ベシャワール会現地代表、PMS総院長

中村 哲

PMS病院長代理

藤田千代子

PMS管理委員会

イクラムラ事務長

ジア副院長

藤田看護部長

◎水源事業職員・98名、作業員約80名（うち水路平均480名）。農業・畜産関係・2名。日本人ワーカー計9名。

◎アフガン・プロジェクト（緑の大地計画）と

ジャララバード支部の役割

（1）医療計画（PMS病院直轄）は当面、既設の以下の診療所に限定、診療所を基点に周辺へフィールドワークを行う。

①場所②カバーする人口③一日外来診療能力

ラシュト診療所……①パキスタン・チトラール

北端②約二万人③五十名

ダラエ・ヌール診療所……①アフガン・ニンダ

ラハル州②約七万人③百五十名

ダラエ・ピーチ診療所……①アフガン・クナー

ル州②約十二万人③百五十名

ワマ診療所……①アフガン・西部ヌーリスタン

②約四万人③八十名

（2）飲料水源事業はPMS病院の指名する管理委員会の指揮下。ダラエ・ヌールは総合特別地区として、診療所内にダラエ・ヌール事務所を併設。支部長はPMS病院長兼任。事務関係の補佐を橋

本兼任。

（3）灌漑・水路事業（PMS病院直轄、支部が協力）は当面、PMS病院長が直接指導、ジャララバード支部が協力

（4）農業・畜産（ダラエ・ヌール渓谷に限定して試行）は日本人ワーカー二名がダラエ・ヌール常駐。二〇〇二年から十年計画。担当・橋本。

中村哲（なかもらてつ）

九州大学医学部卒。専門Ⅱ神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境州の州都ベシャワールに赴任。以来二十年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧民層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、現在アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立、診療にあたっている。九八年には基地病院PMSをベシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も行っている。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレズ）の復旧作業地千ヶ所以上）事業を実践。さらに二〇〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、昨春からはその一環として灌漑水利計画に着手。年間診療数約十六万人（二〇〇三年度）。

PMSの現状（二〇〇四年六月現在）

◎医療事業関係職員・125名（パキスタン・プロジェクト66名、アフガン・プロジェクト52名、日本人ワーカー7名）、うち医師22名、看護39名、検

する。専門家については数ヶ月毎の定期派遣を行っている。○三年度には以下のワーカーが送られた。なお、適性を見るための期間、三ヶ月とし、その上で任務を決定または帰国するのを原則としている。○三年度被派遣者は以下の通り。（別表6）

表2 各診療所の診療数

	一般外来	ハンセン病	てんかん	結核	マラリア リーシュマニア	外来総数	のべ外傷治療	入院 ハンセン病	入院 一般	入院 総数	診療総数
PMS病院	49,437	110	656	36	298	50,537	6,162	178	1,595	1,773	58,472
ラシユト	4,566	4	0	5	9	4,584	151				4,735
ダラエ・ヌール	40,632	12	219	2	1,815	42,680	1,409	-	-	-	44,089
ダラエ・ピーチ	32,548	3	76	0	2,873	35,500	1,652	-	-	-	37,152
ワマ	14,667	0	10	20	272	14,969	972	-	-	-	15,941
計	141,850	129	961	63	5,267	148,270	10,346	178	1,595	1,773	160,389

表3 各診療所の検査件数の内訳

	血液一般	尿	便	抗酸性 桿菌	マラリア リーシュマニア	その他	検査計
PMS病院*	3,491	2,956	2,256	638	2,353	16,710	28,404
ラシユト	0	0	0	0	0	0	0
ダラエ・ヌール	1,764	1,148	1,451	34	4,839	269	9,505
ダラエ・ピーチ	1,672	1,889	2,243	5	3,869	292	9,970
ワマ	412	381	632	0	207	222	1,854
計	7,339	6,374	6,582	677	11,268	17,493	49,733

表4 PMS病院検査数の内訳

血液	3,491	心電図	789
尿	2,956	超音波断層写真	5,014
便	2,256	心エコー	326
らい菌塗抹検査	184	細菌	114
抗酸性桿菌	638	体液（髄液・胸腹水等）	42
マラリア血液フィルム	2,227	その他	1,751
リーシュマニア	126	内視鏡	1,127
生化学	2,502	病理組織検査	0
レントゲン	4,861	小計	28,404

表5 水源確保事業の現状

() 内は完成した井戸・修復したカレーズの数

	飲料井戸	灌漑井戸	カレーズ	計
ダラエ・ヌール	319 (263)	11 (9)	38 (38)	368 (310)
ソルフロッド郡	437 (384)			437 (384)
ロダト郡	223 (202)			223 (202)
カイバル峠	2 (2)			2 (2)
アチン郡	167 (166)			167 (166)
Total	1148 (1017)	11 (9)	38 (38)	1197 (1064)

表6 現地派遣ワーカー

氏名	職種	派遣開始	現在	氏名	職種	派遣開始	現在		
医療 (PMS病院)				16	清宮 伸太郎	水路計画	2003年2月	04年2月終了	
1	藤田 千代子	院長代理・看護部長	1991年9月	継続中	17	鈴木 学	水路計画	2003年3月	継続中
2	藤野 洋子	会計補佐	1999年10月	定期派遣03年8月終了	18	大越 猛	事務・井戸計画	2003年4月	04年4月終了
3	中山 博喜	会計担当	2001年4月	継続中	19	鈴木 祐治	ダラエヌール診療所受付	2003年6月	継続中
4	仲地 省吾	医局長	2002年2月	継続中	20	伊藤 和也	水路計画	2003年12月	継続中
5	M・T	連絡員	2002年7月	継続中	21	本田 潤一郎	事務	2004年1月	継続中
6	坂尾 美知子	臨床検査技師	2002年7月	継続中	22	小宮 秀章	水路計画	2003年9月	04年3月終了
7	近藤 真一	ダラエヌール薬局	2003年1月	継続中	23	高橋 修	農業技術顧問	2002年3月	定期派遣
8	白井 大悟	医師	2003年4月	03年10月終了	24	長嶋 透	土木技術顧問	2002年3月	定期派遣03年9月終了
9	紺野 道寛	連絡員	2003年7月	継続中	25	石橋 忠明	土木技術顧問	2003年12月	定期派遣
10	柴田 俊一	医師	2003年8月	03年12月終了	2004年度新規ワーカー (6月末現在)				
水源・農業計画 (ジャララバード支部)				26	前田 裕之	診療放射線技師	2004年4月～5月	短期派遣	
11	目黒 丞	(旧) 支部責任者	2000年12月	04年1月終了	27	松永 貴明	水路計画	2004年4月	継続中
12	川口 拓真	支部会計担当	2002年3月	継続中	28	進藤 陽一郎	水路計画	2004年5月	継続中
13	橋本 康範	支部責任者	2002年6月	継続中	29	神戸 秀樹	水路計画	2004年5月	継続中
14	馬場 哲司	支部会計担当	2002年9月	03年9月終了	30	鬼木 稔	水路計画	2004年5月	継続中
15	宮路 正仁	農業計画・井戸計画	2002年11月	継続中	31	紺野 勝寛	土木技術顧問	2004年6月	短期派遣

2003年度の主な収支

寄付を頂きました団体の御名前につきましては紙面の都合上、割愛させていただきます。

一般会計 (単位:円)

[収入の部]	
1 会費・寄付	290,485,295 ①
2 補助金等	0
3 収益事業収入	407,196 ②
書籍等販売収益	407,196
4 利息雑収入	48,088
5 その他収入	1,040 ③
年度収入計	290,941,619
前年度繰越	222,684,393
収入計	513,626,012

[支出の部]	
1 現地協力費	204,820,152
うちPMS運営費	60,103,209 ④
水源確保事業	44,405,425
農業支援事業	612,211
診療所建設ほか	22,263,651 ⑤
灌漑用水路	43,976,135
現地ワーカー費	20,968,749 ⑥
渡航費	5,843,705
国内活動費	6,647,067
2 広報費	7,377,318
3 事務局費	15,826,644
年度支出計	228,024,114
次年度繰越	285,601,898
支出計	513,626,012

- ①個人会費・寄付18,079件、団体寄付1,275件
- ②収益事業からの繰入
- ③井戸掘り基金収入
- ④パキスタン・アフガン診療所及び他のすべての運営費
- ⑤診療所、アフガン事務所等経費
- ⑥日本人ワーカー費

'03年度会計報告

収益事業会計

[経費の部]	
書籍売上	479,145
カレンダー等売上	5,638,960
原稿料等	10,000
売上収入計	6,128,105
雑収入	618,020
事業収益合計	6,746,125
[経費の部]	
書籍原価	404,229
カレンダー制作・販売費	4,589,500
送料等経費	12,000
経費合計	5,005,729
事業税	1,333,200

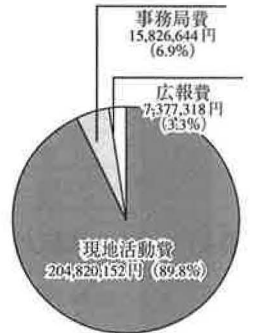
当期収益 (一般会計繰入) 407,196

未使用切手、書き損じ葉書寄付

寄付いただいた件数	1,464件
未使用切手枚数	89,132枚
未使用切手金額	4,162,335円
書き損じ葉書枚数	36,482枚
書き損じ葉書金額	1,761,853円
合計金額	5,924,188円

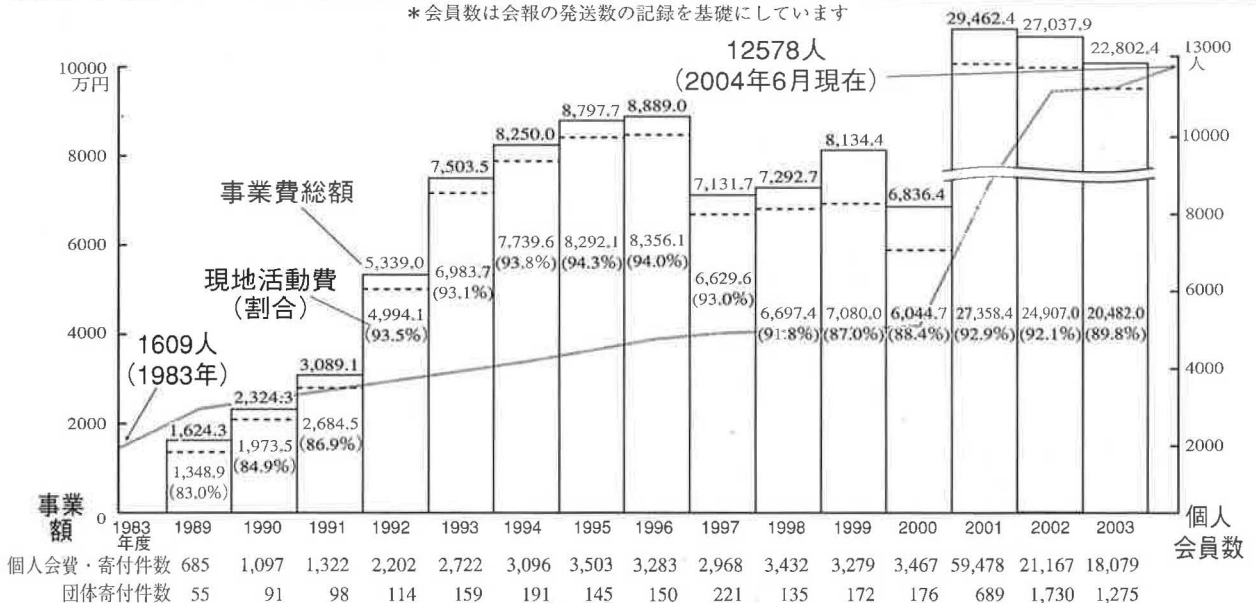
*会報発送費用等の節約になっています。

● 2003年度事業額 (支出ベース)
228,024,114円



事業規模 (寄付件数・事業額) および個人会員数の推移

* 会員数は会報の発送数の記録を基礎にしています



●ベシヤワール会発足二十周年に寄せて

人々のニーズこそ事業の原動力と痛感 灌漑水路建設途上のアフガン派兵を憂う

ベシヤワール会事務局長 村上優

一九八三年に発足し、八四年の中村哲医師による現地赴任から二十年がたちます。二十年記念式典を計画しましたが、水路事業で忙殺され、背水の陣で臨む現地の人々に負担をかけることは出来ないと延期になりました。現地活動を第一とする会の方針らしい選択ですが、関係者にはご迷惑をかけました。二十周年記念事業としてこれまでの会報を一冊にした合本を作り、二十分のビデオを作り（制作・日本電波ニュース社）しました。今年の現地報告会を二十周年記念として、七月十七日に行います。

この一年は医療、井戸、農業、灌漑用水路など多岐に亘る活動で、特に用水路（アーベ・マルワリード）建設に多くのエネルギーが注がれました。取水口の完成（本年三月）、遊水池とした広大な池（というより湖）の建設、さらには岩盤を崩し、独特の砂（ハウルとよばれる微粒子の砂、雨が降ると固まる）を掘り、必要ところは蛇籠で補強しながら積み上げていく作業など中村医師の強烈な指揮の下に進んでいます。

最も特徴的なことは現地で活動する日本人ワーカーの増加です。現地事業はバキスタン・アフガニスタン人が医療関係で百五十人、水路関係で百人が常勤として、臨時の作業員には七百名が参加しています。日本

人ワーカーも医療、事務や財務管理、用水路の設計や現場指揮の部門で現地の人々と一緒に働いています。その数は常に十八人から二十人で、全て一年以上に亘る働きを前提としています。文化や風土の全く異なる中で二十歳代の若者の働きは目覚ましいものがあります。会報をご覧頂ければ折に触れ報告を寄せています。また現在は豊富な経験や技術を生かしたシニア・ワーカーの希望も増えてきました。

一方でイラクへの自衛隊派兵や、一部報道されたアフガンへの自衛隊派兵の可能性などによる対日感情の悪化が心配されます。政府関係者や一部マスコミが「NGOの自己責任」と石を投げ死者に鞭打つときに、戦争に加担する政府の責任は棚上げされています。自衛隊がアフガンに派兵されベシヤワール会の活動に制限が加えられた場合の現地プロジェクトへの影響が危惧されます。医療や水源確保、農業の復興をめざし、同時に雇用という形で生活を支えながら現地で一緒に日本人が働くことが、どれほど相互の理解と安全、生きる糧を生み出すかを静かに主張したいと思います。

この活動を日本の多くの方々のご支援下さいました。昨年度は全国から一万九千件、二億九千万円の寄付が寄せられました。思いもよらない所からも理解や共感

をいただきました。会計は法人に求められるレベルに合わせ税理士に監査をお願いしています。カレンダーや書籍販売などで収益の上があったところは定められた税を支払っています。また法人格を得るようにとの意見があり、その是非について検討しています。社会のルールに沿って、しかし今の社会が片隅に追いやって善意と良心を呼び戻す場になれば願っています。この四月に二年ぶりに現地を訪れることが出来ました。PMS病院は完成後六年がたち、風格が備わり、基地病院としての役割を果たしています。イクラムラ事務局長やジャ副院長などの人材にも恵まれ、藤田看護部長が現場を飛び歩く中村医師を代行して院内をまわっています。トルハムにある国境のアフガン側にPMSが作った井戸があり、水がバザールに供給されています。一キロ以上に渡って十メートルおきに蛇口が設置されています。見に行くと機械油で真っ黒になった子供が寄ってきます。

また、アーベ・マルワリード用水路は感激で、特に人口湖はその大きさと静けさに感動しました。水がくるところを聞いて人々が戻り、荒れ果てていた畑を再び耕し始めています。試みに植えた麦は成育せず枯れていましたが、水がくれば立派な畑になります。この人々のために早く水路を完成させたいものです。一方で乾燥に強く現金収入になるケシが多く植えられました。それを非難ばかりしても実態は変わりません。ケシに頼らずに生きる術を獲得することが実効的です。茶の栽培はそのひとつの試みですが、土壌がアルカリ性で茶の栽培には土壌改良の問題が立ちはだかっています。困難があるから私たちの協力が必要とされると実感します。悪路で捻挫した足を引きずりながら大型機械の操作もマスターして作業の先頭に立つ中村医師の背中に引きずられての旅でした。

*ワーカー通信

患者情報の扱いにも

お国柄を感じてしまいます

PMS医局長・医師

仲地省吾

ペシャワールの熱波

五月後半になって、最高気温は常に四十度台前半になります。これくらいになると、ほぼ毎日熱波による死亡記事が新聞に出るようになります。犠牲者は大部分がやはり高齢者です。多くの貧しい家庭ではエアコンどころか扇風機もないので、この気温は想像を絶するものです。PMSの病院でもエアコンを置いているのはほんの一部の部屋だけで、病室も含めてほとんどの部屋は天井ファンだけです。以前にも何度か書きましたが、この時期は湿度も極端に低いので、何とかしのぐことができます。気温四十三度、湿度十パーセントなどという状況は日本では決して体験できない不思議な体感です。病院の廊下でこの熱風に当たるとふわっと浮かび上がるような猛烈な熱さですが、決して汗が出ないというへんなすがすがしさがあります。そんな中でも病院の地下の部屋に行くと、

そよ風程度のファンだけで、とても快適なのです。その代わり最上階にある日本人ワーカー用の居住区域は地獄のような暑さです。

サマリイ

前回に続いて、パキスタンの(PMS)の医療内容を紹介します。患者さんはどの病院に入院しても退院時には必ず入院中の病状のサマリイ(診断要約記録)をもらっています。患者さんは外来受診時には必ず、そのサマリイをすべて持ってきますので、以前どんな診断、治療を受けていたかよくわかります。日本でも現在は健康保険で義務づけられたということもあって、ほとんどの病院でサマリイを退院時に渡していると思います。が、一般的になったのは比較的最近のことであって、パキスタンでは昔からの常識(慣習)であつた様です。この点では医療情報の開示が日本より進んでいたと言えます。

退院時サマリイ以外には、他の外来で受けた処方箋はもちろん、各検査の結果もすべて患者さんが持っています。心電図やX線、CTなどについてはフィルムや実物そのものを持ってきますので、パキスタンに来た当初はとても驚きました。患者さんによってはこれらの大量の資料を外来受診時にどさっと診察机に投げ出したりする人もいますので、私にとってはこれらを解説するのもまた一仕事です。日本では検査の結果を渡すことはあつて



ラシュト診療所で診療中の仲地医師

も、実物そのものを提供することはほとんどないです。ですからここでは胸部X線で異常があったりしても患者さんが以前の写真を持つていることが多く、すぐその場で比較できますので、とても便利です。日本では以前の写真と比較しようとすればちよつとやっかいな手続きが必要になります。

サマリイ開示はパキスタンが先進国？

どうしてこういう状況になったかたという一つは医療費の関係からだと思えます。健康保険が存在しないので、患者さんはすべて実費を支払い

ます。ですから資料などすべては患者さんが所有する権利があるという考え方です。逆に患者さんがすべての資料を持っているとすれば、病院側には何の資料も残っていないというのが欠点になります。

PMS病院では他の病院と違って入院中の医療は基本的には無料ですので、上記の原則からすると入院中の資料は病院の所有物となるので、退院サマリー以外は患者さんにお渡ししません。ただし、入院中に例えばCTなど他の病院に依頼し、患者さんが費用を支払った場合はその写真は患者さんの物になるというわけです。ですので、PMS病院には日本と同じく過去の入院病歴資料がすべて残っています。ただし、日本でもちゃんとした病歴室のシステムと専従の担当員がいなければ、過去の資料を検索するのは大変な仕事に（不可能に近く）なりますので、PMSでも過去の資料を引き出すのは大変困難です。

私はパキスタンの病院がすべての資料を患者さんに渡しているのは単に権利の問題からだけではなく、病歴室などの面倒な仕事を放棄しているという病院側の事情もあるのではと思っています。外来カルテというのも存在しないのが一般的です。ですからPMSでも頻回に受診している患者さんについても、その度に同じ問診を繰り返し、もし患者さんが前回の処方内容や検査結果を持ってこなければ前回どんな診断や治療をしたかもわからないというやっかいなことが起こります。

アラビア風アルファベット？

患者さんの資料を「解説」すると書きましたが、

これが私には大変難しいのです。英語の筆記スタイルにはその国の本来の文字が大きく影響していると思います。そのため、私にとってはこの医師の書く英文書はアラビア文字風に見えるのです。もちろん現地の医療習慣や薬のブランド名をまだよく知らないというのが、解説を困難にしているのも理由ですが、私にはアルファベットさえ読みとれないのです。日本でも医師の字は汚いのが普通ですが、英語のアルファベットが読みとれなかったというのはほとんど記憶がありません。実は現地医師にとっても他の医師の書いた英語を読みとるのは、けっこう大変だというのがわかり、ちよつとほつとしています。

総回診時に他の専門医に患者さんを紹介して返ってきた返事をみんな読むとき、ちよつとした暗号解読会議風になって、おかしくなってしまふことがよくあります。PMS病院の中にも全く解読不可能な字（汚いか、またはスタイリッシュ）を書く医師がいて、回診中にその医師の書いたカルテを読むとき（本人が不在中）、私は「このカルテの字は（英語ではなく）アラビア文字だと思っていた」と皮肉りますと、即座に他の現地医師が「俺は日本語だと思っていた」とやり返されたこともあります。

*

*

私は現在（六月十五日）、ラシユトのクリニックに来ています。二年前以来二回目です。ラシユトは三千メートルの高地に突然出現する緑の小さな平野（盆地、周りは六千メートル級の山々）で牧歌的な美しい村です。二年前となんの変わりも

なくとも懐かしく思います。ただし、水河の長ささらには少く短くなつていて、地球温暖化の影響があるのだと思つて、ちよつと不安になりました。受診する村人もとても素朴な人々で、緊張することなく仕事ができています。今ラシユトのクリニックでは増改築の工事が行われており、五月の初めから日本人ワーカーが現地採用している村人の先頭に立つて仕事を指導しています。私が六月はじめに来たとき、彼はすでに真っ黒になつて生き生きと動き回っていました。

明日その日本人ワーカーがチトラール（ラシユトから車で十時間くらい先の所にある地方都市）に工事用の買い出しに行きますので、そこからこの会報の原稿をベジャワールに送ってもらうことになつていきます。

▼寄附をさせていただく皆さまへ▼

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄附については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、御願いたします。

▼記入は分かりやすく▼

*ご寄附をお送り頂いた郵便払い込み用紙は、郵便局からはコピーが届きますので、判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

▼未使用の切手、ハガキを！

*会報の発送等の通信費に、年間数百万円かかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。（使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい）

用水路への期待は 想像以上です

灌漑用水路計画担当 伊藤和也

五〇度の猛暑

暑い。現在私は、水路事業の一員としてカナル（灌漑用水路）の現場で働いていますが、朝七時を過ぎると暑さが本格化してくるようになります。ただ、最初はうわー暑いなと思っていたのも、最近は今日も暑いなと漠然と感じるだけ。温度計もないので、周りの人が今日は四〇℃、五〇℃だったといってもいまいち実感がありません。そのような中カナルの現場で仕事が進められているのですが、皆様もご存知の通りD地区（貯水池）までの通水が無事終わり、現在はD地区以降Q地区まで通水（Q地区迄通水すれば農地に灌漑可能）を目標とし中村医師を始め、先輩ワーカーである鈴木学さん、日本から再び来られた石橋さん、新たに来られた鬼木さん、進藤さん、現地職員、現地レイバー（作業員）と共に仕事をしています。

悪化する政情予想し作業は急ピッチ

現在の灌漑用水路の進行状況は、D、E地区の掘削、P、Q地区のフィリング（埋立て）、そし

て自分が今取得を目標としているコンクリート構造物の作成が主な仕事になっています。

E地区の掘削は現在レイバーによる手掘りで行っていますが、D地区の掘削、P、Qのフィリングに関しては冬の上記以上の重機を投入（合計ダンプ二十八台、エクスカベーター八台、ローダー五台）し、急ピッチで作業が進められています。その理由として八月の自衛隊派遣（実際はどうか分かりませんが）、九月の選挙があるからです。中村先生がおっしゃるには政治情勢は急激に変化するとのこと。ですから九月に情勢変化が起る可能性が高いのではという事があり、急ぐ必要があるのです。九月までになんとかQ地区までの通水を可能にするために、自分自身が出来ることを全力でやっていきたいと思っています。

儉約の精神で

備品購入に奔走

ジャララバード事務所 本田潤一郎

「現場」を後方支援

現地で勤務を始めて早や五ヶ月、私は現在ジャララバード事務所のオフィスセクションで働いています。オフィスの仕事は事業全体がうま

子供たちも期待

実際現場で仕事をしていて感じなのですが、地元住民の、用水路に対する期待が非常に大きいことを感じます。地元住民の多くはレイバーとして働きに来ているのですが、ここにはいつ水が来るんだと毎日のように聞かれた時期もあり、また測量するときレベル（水準点）をペンキでマークをつけていくのですが、マークを踏みそうなお子に「このマークが消えると水が来ないぞ」と言う慌てて足を引っ込めたりと、小さい子まで水が来るのを待っているんだなと思います。

現在このような環境で自分が仕事を出来るのも皆様のご厚意のおかげです。この場を借りてお礼を申し上げます。

く廻るようないろいろな面で後方支援する事です。以前働かれていた大越さんから仕事を引継いだ後、橋本さんや川口さんの指導の下、オフィスの仕事について少しずつ学び、理解できてきた様な気がしていました。しかし、この度橋本さんが一時帰国されて一人でオフィスの仕事をやってみると（現地人スタッフはいます）、初めて体験した様々な問題に戸惑い、スムーズな後方支援が出来ませんでした。無念な気持ちで一杯でしたが、一人でやってみる事で自分の未熟さやオフィスの仕事の難しさが本当の意味で理解でき、良い勉強になりました。

現在は、橋本さんが一時帰国から戻られて主にオフィスで仕事をされているので、橋本さん

農業計画の歩みを振り返って

農業指導員 高橋 修

早魃と戦乱によって荒れ果てた農村を復興する目的で、2002年の2月に「緑の大地計画」がスタートしました。砂漠化した農地を灌漑して適作物を栽培し、緑の沃野に甦らせる活動です。

農業計画の核は、ダラエヌールの長老会（ジルガ）から提供された2カ所・計約80アール（8千㎡）のパイロットファーム（試験農場）です。

農業計画のキーワードは「現地主義」です。私たちは、パイロットファームの作付け前に農家の意向と畑の状況を細かく調査しました。その結果、①農業計画は農家が主役、②現地の技術を基にして、③資機材は現地調達を基本にして、の3点を確認しました。

基本方針に則って、パイロットファームで試験栽培する作物は、まず生き延びるための主食と飼料作物を、次いでケシに代わる換金作物を導入することとしました。今年6月現在で、主食用の作物は水稲5.6アール、大豆・玉蜀黍3.4アール、甘藷22.8アールです。また飼料作物としては、アルファルファー（豆科）が24.9アール、ソルゴー68.9アールとなっています。

（なかなか難しいことですが）ケシに代わる換金作物に育てることを目的として、昨年秋にお茶を7.0アールとブドウを5.0アール植え付けました。将来が楽しみです。

苦勞していることは、土を肥沃にするための有機物資源が地域にほとんどないことです。牛の糞も家庭燃料に用いているような状況です。このため年1回は、どの畑も豆科作物とか緑地作物を栽培するようにしています。またダラエヌール全体がアルカリ土壌で、しかも灌水すると畑の土がセメントを溶かしたような状態になるため、一部の作物では初期成育が旨いきません。また特にアルカリ性に弱いお茶の栽培には苦心しています。深く耕しながら有機物を増やす対策を講じ、灌水方法を改善しながら対処しています。

最後に、嬉しいことは、アルファルファーの年6回収穫とソルゴーの年4回収穫が成功したこと、甘藷の評価が非常に高く非常に勢いで普及しつつあること、飼料作物を貯蔵したサイレージによって「冬に牛乳が飲めるようになった」と喜ばれていること等です。

何よりも嬉しいのは、ペシャワール会の現地要員であるMr.フリーとパイロットファームの担当農家が立派に成長したことです。橋本さんの指導の賜物と感謝しています。

の休暇中に急遽臨時で担当していた灌漑用水路の後方支援のアレンジ役を終えたので、以前の様にオフィス内部の業務中心に仕事をしています。今後特に力を入れていくのは、倉庫の管理です。困っている人に役に立つ為にペシャワール会を応援し寄付してくださった会員の皆様の募金で購入した物品をきちんと管理するのも大事な仕事だと思えます。

物品購入時のルール

会員の皆様からのご寄付を大事に使うという意味で、PMSではひとつのルールがあります。物品を購入する場合二、三店舗廻り、質に問題がなければ一番安い店で購入します。私と同じオプイ

スセクションで働く現地人スタッフは、このルールを守る事の重要性をよく理解している一人です。つい最近彼と物品購入の為バザールへ買い物に行ったときの事です。その日は、朝から体調が悪く（腹痛のほすが、熱も三八度以上あった）既に三つの用事を済ませ、後はベッド（明日にも必要だった）を買うのみだったのですが、ここでは注文してから作ってもらうのが常で明日までに用意するには既製品でなければならず、一軒目で「三千七百ルピーで既製品売るよ」と言われた以降の店

で既製品がなかった事もあり、体調不良と暑さの為半ば諦めかけていました（皆さんすみません）。しかし、サブールが六軒目で二千八百ルピーの既製品を見つけ、それを購入しました。

「PMSはお金を無駄にしない」

帰り道に彼が「ミスター本田、諦めず探したから一軒目より九百ルピーも安く購入できた。PMSはお金を無駄にしない良いルールを持っている」と言っていました。確かにルールに則った結果ですが、気温四〇度を越す日中に六軒目まで諦めずに廻った彼の姿勢に一層の信頼を重ねた一日でした。

最近今までにないほど非常に充実しています。この機会を与えて下さった事務局の方々、PMSを応援し存続させて下さっている会員の皆様に感謝しています。これからも自分らしく頑張っていきます。今後もし宜しく願います。

PMS 病院検査室のある一日

PMS 臨床検査技師

坂尾美知子

いつものように全員での朝礼、その後二十五名ぐらいのメディカルスタッフだけのミーティング、そして検査室のミーティングで一日は始まる。メンバーは、チーフのドクター・ナキーブ、ヤルーラ、イムラン、坂尾にレントゲン技師のカユム、先週からババジャンが加わって総勢六名である。検査室はこの二年で九名の退職者が相次ぎ、アフガニスタンの三ヶ所の診療所に満足に技師が派遣できない状況が頻発している。地元の人を採用して診療所勤務ができるよう研修するというので、ババジャンがダラエヌールからやって来た。

検査室は外来診療開始に少し遅れ九時半ぐらいから忙しくなってくる。

受付は、検査を受けに来る人、採尿したコップを持って来る人、内視鏡の予約を取る人、結果をもらいに来る人、ピーク時はかなり混雑する。結果はその日の内に順次返していく。患者は半数ぐらいが小さな子だが、採血時もおとなしい子が多い。泣いても暴れる子はほとんどいない。

受付のヤルーラは上手に患者をさばき、遅れている検査があれば強引にスタッフをせかし、便が出ない人にはその料金の払い戻しの手続きもする。イムランは外来の男性の心電図依頼があると尿検査の合間を縫って一階に降りていく。時にはドクター・ナキーブも心エコーのために一階に行く。私は検査室から出ることは殆どない。このところ調子の悪い自動血球計測機が悩みの種だ。一

週間前から検査室は午前中だけクーラーを使用しているが、それでもやっと三〇〜三一度。原因は暑さと部品の劣化だが、部品の値段があまりにも高すぎて購入を逡巡している。ババジャンも終わった伝票を運んだり、染色や尿検査などできることを一生懸命手伝いながら合間に顕微鏡を覗いている。

今日は新入院患者が三名と少なく検査室も久しぶりに十二時半に午前の仕事が終わった。イムランは、午後からオフ。彼はナキーブがアフガニスタンの水路工事用ワイヤーの買い付けで十日間ほど検査室を留守にしていた間、宿直・日曜勤務と休みなしで働いたので、午後から四連休で遠くの実家に帰って行った。

午後、一日の仕事も終わり、清掃の人が検査室の廃棄物を焼却炉で処理するのについて行く。検査室では使い捨ての注射器やメスを使用しているが、血液汚染された使い捨ての医療器具が市場に出まわる事件がバキスタンで問題になったそうだ。医療廃棄物はその部署で最後まで確認するように言われている。

他に検査室には診療所に行っているハビーブ、アフガンの二人がいる。ハビーブは病院にいる時は検査室の仕事以外にキッチンの仕事、内視鏡も手伝ったりと大忙しである。アフガンは家族をパシワールに置いて一年の三分の二以上をアフガニスタンの診療所暮したが不平も言わず気持ちよく働いている。今日は久しぶりにスタッフも揃い、落ち着いた普通らしい一日だった。

泣き蟲アミンの帰郷

甲斐大策

岡は頂きに近く、大小の盛り土が見えてきた。ヌール・アミンの眼に溢れた涙が赤い土に落ち、血の滴りのような点になる。小灌木の間を灰色の野兎が走った。四十度誓い熱気が地表に激んでいる。

「アッラーフ・マ・ラカ・スムトゥ・ワッア……」
ハジ・アリムは食卓でラマダン中の食事の許しを神に乞う。英印時代の造りを入口上部に遺す色硝子が、赤や青の光を放ち始めた。夜明けが近い。

九十歳歳のハジは、この五〇年、アリヘル系の運送業の全てを仕切ってきた。パシワール旧市街路次裏の小レストランが住居兼オフィスである。出稼ぎの為の旅券と就業ヴィザ取得、渡航費、賄賂も含む諸手数料等々、三千ドルを立て替へもする。純白の髭に覆われた表情は優しいが眼光は鋭い。
アミンの出稼ぎもハジの手配による。

二三歳でドバイへ出た二年目、アミンは父の死に戻れなかった。六年目の今年、借金返済を終え、次の渡航も用意しての帰郷である。

「その花、午後には萎んで沈み、二度と見れない……」
入口脇の水槽に浮かぶ睡蓮を見ながらハジが口にした言葉にアミンは、二度と会えない父を思い涙ぐんだ。

「チビの頃のお前、泣き蟲アミンだったナ。……これ、頼まれていたカーブルの物だ、ユスフが持ってきたよ。母上によるしくな……」

カーブルに埋葬を、といい残しつつ異郷に眠った父へ、ドバイからハジに頼んでいたカーブルに因む品が、ビニール袋に入っていた。紅色の薄荷水入り小瓶とクラアーン的一篇を彫った小さな石板だった。

父の墓には、青灰色のユーカリの枝が立ち、真新しい緑色の布がはためいている。下方、コハトの荒地を埋めるアリヘル系流出民の泥屋の垣がりも、岡の頂上に連なる墓も全て、湧き上る涙の中にぼやけていく。

ペシャワール会発足20周年記念
「ペシャワール会報合本」
最終予約受付中!

すでにご予約の方は7月中旬お届け

B5判上製1312頁・カラー32頁

予約特価8400円

(石風社刊/定価10500円/税込/送料不要)

以前から本会報を通じて予告しておりました、「ペシャワール会報」20年分のバックナンバーをまとめた〈合本〉が、ようやく今夏刊行の運びとなりました。ペシャワール会発足当初の第1号(1983年12月)から、前79号(2004年4月)までを、原寸のまま収録しております。また巻頭のカラーグラビアでは、現地活動の20年を振り返る写真編、巻末には年表・資料を収め、派遣当時の中村医師の苦闘や、その後の活動の推移、各ワーカーの葛藤の様子が克明に記されております。国際援助に携わる方や学校の教員の方々など、一NGOの実践の記録として参考にしていただければ幸いです。

すでにご予約の方には、刊行時期が大幅に遅れ、ご迷惑お掛け致しました。深くお詫びいたします。また、部数が限られておりますので、まだご注文でない方は早めにご予約下さい。



代金は後払いです。まずはハガキでご注文下さい(お届け時に郵便払込用紙を同封します)

水路建設、夏の陣

農業計画担当
橋本康範

夏の陣が始まった。水路のことである。前回の冬の陣で何とか勝利を収め、ほんのひと時勝利の美酒に酔った。(実際アルコールを口にしたわけではないが...) 酔いすぎて放心状態になった。あの状況を潜り抜けてからなかなかエンジンがかからなかった。自分を含め他の日本人ワーカー、そして現地のスタッフたちも、である。水路の一部の完成とはいえ、あまりにも激しい工事の末の通水であったので、どこか大きな達成感・安堵感に包まれ、

我々はなかなかそこから抜け出せないでいた。そんなとき、「自衛隊、アフガンへ派遣」の情報が流れ、数々のイラクでの外国人に対する惨事、そしてとうとう日本人へもはつきりと牙先が向けられた。そのような暗雲が立ち込める中(さらされてしまった)我々は常に最悪の状況を考えながら活動しなければならなくなった。再び中村医師が目標を、G地区までの通水と掲げられた。それはG地区まで通水できればたとえ我々がいなくてもそこからは何とか現地スタッフで工事を進めることが出来る、また現在通水がすすんでいるD地区から先のE、F、G地区から本格的な灌漑が出来るためである。今はレンタルの重機、各種機械を大幅に増やし、急速日本人ワーカーも増員して極暑の中、時間と体力とも戦いながら緊急体制をしている。井戸のほうも一つの試練のときを迎えている。現在かなりの数の井戸の水位が下がり始め、完全

に涸れてしまっている井戸もいくつかある。先月からソルフロッド郡を中心にはじめた井戸の譲り渡し軌道に乗り出した矢先のことである。これで井戸の譲渡も大分慎重に行なわねばならなくなった。涸れている、涸れ始めている井戸をそのまま村人に渡すわけにはいかない。また、すでに完全に井戸を村人に譲り渡していたアチン郡から三つの村の有力者が事務所を訪ねて来た。それは春に井戸の水位が上がるところか、下がる一方なので自分たちで修復を始めたのだが90m近く掘っても十分な水位が確保できなかったり、手掘りでの修復途中、井戸の内側の壁がゆるい土砂のために崩れてきてそれ以上はどうしても掘り下げられなかったり、と自分たちではもうどうにもできないということだった。一度完全に譲渡しているもの、彼ら自身で管理の範囲を超えている状態、また彼ら自身何とか努力した後の決断なのでこれではあま

りにも村人がかわいそうだということでも再び我々が修復を手伝うことになった。ダラエヌールの灌漑用の井戸も例外ではなかった。軒並み水位が下がり始め、水位が5mを切った二つの井戸の修復工事を急いで開始することにした。現地ではこれから小麦シーズンが終わりトウモロコシシーズンに入り水が余計に必要になってくる時期だ。農業計画のほうもひとつの節目を迎える。農業計画が始まって三年目を迎え、どの作物が現地に合っているか第一段階での最終決定に入る。特に大豆・トウモロコシ・芋類・飼料作物である。またバキスタンから移植した苗も一部年目の苗に突入するので、このアフガンの地で育ったお茶が我々の喉を潤す日も近づいている。そして新たな挑戦として稲作を始めた。旱魃、国内の混乱、世界情勢と日々様々なことに翻弄されながらも、しかし、我々はただ大地に向かい黙々と先に進むだけである。

●事務局便り

*イラクにおいて日本人を巻き込む事件が立続けに起こった。特に三人が人質になった事件では、「自己責任論」を巡って、バッシング派と擁護派の論争の様相を呈した。ボランティアの「善意」とフリージャーナリストの「使命感」を疑うものではない。私たち自身、「他者の苦境を見棄てられない」という日本中の善意に支えられて活動を行ってきた。仮に日本人がそのような心根を失う時は、日本民族衰亡の時だと思ふ。ただ今回の「自己責任論」を巡る議論を聞き、ある欠落感を感じざるをえなかった。紛争地域で活動する以上危険はつきまとう。しかし危険があるからこそ常に現地の状況を把握して慎重な行動が要請される。そのことは当然のことであって、「自己責任論」以前の問題である。「議論」に感じた欠落感、現地・現場との乖離である。つまり責任を取るべき問題があるとすれば、現地にとって必要な支援とは何かを認識し、その上で継続的に活動することに尽きるところからである。

アフガンでも空爆直後に世界中からボランティアやジャーナリストを名乗る人たちが押し掛けてきたが、話題性がなくなると潮が引くように消え、現地には失望感と不信感だけが残された。中村医師がかつて語った「現地は外国人の活躍の場でもなければ、善意の捌け口でもない」という言葉が、苦く思い出される。

「責任」の問題で言えば、世界が暴力応酬の巷と化したのはブッシュ政権の責任であり、日本国民の生命が内外で危険に曝されるのであれば、米国防権に追随「派兵」した日本政府の責任であることを明記しておきたい。

*お気づきの通り、80号を機に表紙を一新しました。前号までと同じく装幀家で会員の毛利一枝氏の手によるものです。深く感謝申し上げます。

◎村から

出合いとは不思議なものです。十数年前たまたま図書館で借りた「アフガニスタンの診療所から」を読んで中村医師とペシャワール会のことを知り、強く引かれるものを感じました。そして今、事務局で会報発送やお礼状書きのお手伝いをしています。会に送られて来る全国各地からのお便り・はがきや切手の整理をしながら、会の方針に賛同してくださる方の輪が広がっていつているのを嬉しい気持ちで見えています。来る七月十七日の総会では、中村医師のお話や、現地ワーカーとして活躍している若者達の生の声が聞けるのを楽しみにしています。そして何より会場での質疑応答がいいですね。平和を望むという共通の気持ちの中にも、人それぞれに色々な違った考え方のあることを改めて知らされます。ご都合のよい方は総会に参加されませんか？(光)

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行なうことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 毎年の改選は毎年総会にて行う。役員の運営について審議する。
- ⑨ 本会の事務局をFARAH HOUSE (〒八一〇〇〇四一 福岡市中央区大名一丁目一〇―二五 上村第二ビル三〇七号 TEL 七三二―二三七二) 内におく。

中村哲医師の本
空爆と「復興」

—アフガン最前線報告—

9.11テロ直後から2003年末まで、中村医師と現地日本人スタッフから届いた、鬼気迫る活動報告集 1890円



辺境で診る 1890円
【3刷】 辺境から見る

ダラエヌールへの道 2100円

医者 井戸を掘る 1890円

医は国境を越えて 2100円

ペシャワールにて 1890円

聖愚者 甲斐大策
の物語

「表紙をめぐる小さな物語」が、書下しを加え一冊に 1890円



石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24 TEL 092(714)4838

ほんとうのアフガニスタン 1260円

光文社 東京都文京区音羽1-16-6 TEL 03(5395)8125

アフガニスタンの診療所から 1260円

筑摩書房 東京都台東区蔵前2-6-4 TEL 03(5687)2670

価格はすべて税込価格(税5%)です